

この「匈奴」の時代 日本は弥生時代で鉄器時代には入ったものの、まだ 製鉄技術はなく、中国大陸から「鑄造鉄斧」などの鉄器が使われた時代である。

その後 移入鉄器や素材にして鍛冶加工して鉄器作りが進むが、日本で製鉄が始まるのは5世紀後半。

しかも、中国の先端技術であった溶融鉄還元間接法が広く行き渡っている東アジアの中で、大陸・朝鮮半島と広く交流があったにもかかわらず、唯一ヒッタイトの鉄からつながる塊錬鉄直接製鉄法である「たたら製鉄」が始まる。

なぜ、効率よく量産できる溶融鉄還元間接法ではなく、塊錬鉄直接製鉄法が伝わり、

その後長くこのたたら製鉄が行われ続けたのか???

東アジアで塊錬鉄直接製鉄法が消えてゆく紀元前2世紀の漢の時代から5世紀にかけて、この塊錬鉄直接製鉄法を受けついできた地域がきっとどこかにはあるはずであると。

いまだにこのたたら製鉄の伝来ルートは謎のままである。

ところが、中国では溶融還元間接法での量産製鉄をすでに始めていた紀元前3世紀から紀元1世紀にかけての匈奴の時代に、製鉄技術を持たぬと思われていた「匈奴」は塊錬鉄製鉄法で鉄を作り、世界を駆け巡っていた。

この「匈奴」の時代 そんな塊錬鉄の製鉄技術の痕跡がユーラシア大陸中央の草原に点々とあり、モンゴル・西シベリヤやバイカル湖周辺にも及んでいるという。

ユーラシア大陸の東西を結ぶ金属器&鉄器文化東伝 草原の道「Metal Road & Iron Road」が信憑性をもって語られ、もう少して、中国を経ずとも東アジアの日本海沿岸につながるのでは・・・と期待が膨らむ。

まだ、発掘調査は端緒にすぎたばかりで、発掘数も少なく、今回の「鉄と匈奴」のシンポでは たたら製鉄など日本との関係に触れた発表はありませんでしたが、今後に期待が膨らむシンポジウム。

聴講中に 講演スライドを一部撮影させていただきましたので、それらから、シンポジウムで得た情報を私なりにまとめさせていただきました。

なお、「鉄と匈奴」のシンポジウムの講演発表の詳細は予講集が出ているので、そちらをご参考に。

また、11月20日 朝日新聞朝刊にこのモンゴルで出土した「匈奴の製鉄炉跡 ホスティング・ボラグ遺跡発見」の紹介記事が出ましたのでご参考まで。

◆ 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター 第六回国際学術シンポジウム

「鉄と匈奴 遊牧国家像のパラダイムシフト」予稿集 2013.11.9.

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター



◆ 11月20日 朝日新聞 朝刊

「匈奴の製鉄炉跡 ホスティング・ボラグ遺跡発見」

「匈奴、独自に鉄生産か 中国から略奪に異説」

愛媛大などモンゴルで炉跡発見

